



まず、教師自身の研修観を問い直そう

子どもが自ら学び考え、自ら考えることが重視され、主体的な学習の研究が各学校で行われている。学習指導案にも子どもの意識の流れが想定され、子どもたちが主体的に学ぶ支援も具体的に書かれるようになってきた。子ども中心の授業を創ろうとする気持ちの表れである。

しかし、どうしても気になることがある。それは、主体的な子どもの学びを創ろうとする際の教師の学びが、受身的・消極的なことである。新年度を迎え、新たな研修主題や年次計画が提案され、研修が始まったと思う。研究授業も研修計画通りに行なわれているだろう。自分が行なう研究授業だけに全総力をあげて、他の仲間の授業を傍観したり、苦勞は若い時に買うものとはばかりに研究授業を譲ったりしてはいないだろうか。ここで大切にしたいことは、研修を人事(ひとごと)ではなく、どれだけ自分事(じぶんごと)としてとらえられるかである。今、自分の研修に対する見方や考え方を問い直してみたい。

子どもの学びを互いに語る意味

「どうしても、この子どもたちをよくしたい。」という強い意志と「少しでも、腕のよい教師になりたい。」という切実な願いがない限り、教師としての成長はない。そのためには、目の前の子どもの姿・事実に対して謙虚になり、素直に子どもから学ぼうとする姿勢を、教師は持ち続けたい。その子にとって、意味のない発言や行動はないというスタンスに立ち、子どもの本意や真意を丁寧に汲み取り、学習の方向性を考えたい。したがって、子どもの姿・事実を見取る力は、勿論、省察する力も身に付ける必要がある。

真正面から子どもと向き合い、学校の仲間である教師と子どもの事実で語り合いたい。子どもの一人ひとり内面を考えるきっかけにもなる。このきっかけから、子どもの目線を重視した学習を構成することになり、結果、子どもの学びの質を高めることにつながると思う。

(芝)



真剣に対象と向き合う